# 三野町における完全学校週５日制実施後の地域活動に関する調査研究

教育班（徳島教育社会学会）

伴　恒信[*1]　森　祐大[*1]　早渕百合子[*1]　朝日　真奈[*1]　大久保邦博[*1]　城間　美幸[*1]
瀬尾　真朱[*1]　前田　達郎[*1]　小林　典子[*1]

## １．研究の目的

2002年度から全国の国公立小・中・高・盲・聾・養護学校で学校週５日制が完全実施となった。そこでは子どもの生活にゆとりを持たせるとともに、体験活動等を通して、自ら課題を見つけ、自ら考え課題を解決する能力や、自己の生き方について見つめる、いわゆる「生きる力」を育成することがねらいとされている。

しかし、一方で学校週５日制は大人社会の週休２日制にあわせた制度である、とか学校週５日制導入へ向けての議論には子どもの希望や願いが必ずしもあったわけではないということも言われている。

また、「学校週５日制の受け皿が十分にできているのかどうか」ということが、学校週５日制が導入されるまでの過程において議論の対象となっている点もある。

そこで、本研究では、「学校週５日制の完全実施により子どもにゆとりは生まれたのか」ということを明らかにするとともに、「地域行事がどのような現状であり、学校週５日制によって生まれた自由時間を活用する場として、どのような効果を持っているのか」ということを中心に据えて研究を進めていくこととする。そして、調査研究を通して学校週５日制完全実施初年度の現状を把握するとともに、課題をより明らかにして学校週５日制完全実施後の「子どもの居場所」のひとつとしての地域行事の今後の展望を考えていくことを目的とする。徳島県三野町を研究対象地域とし、家庭、地域、学校、学校週５日制に関する親子間の意識を調査するとともに、学校週５日制での子どもの変化や、学校週５日制が子どもにもたらす影響について考察する。

## ２．調査の概略

ア．調査時期：2002年10月中旬～11月初旬

イ．調査の対象：徳島県三野町の小学校４、５、６年生とその保護者

配布数　児童：178　保護者：178（88.2%）

回収数　児童：157　保護者：142（79.8%）

ウ．調査方法：自記式質問紙調査（四段階評定法）

エ．調査項目

①「学校について」
②「友だちについて」
③「家族・地域のひととのかかわり」
④「遊びについて」
⑤「体験活動について」
⑥「自分自身について」
⑦「親の言葉かけについて」
⑧「興味・関心について」
⑨「得意なことについて」
⑩「学校５日制に対する親の意識」（保護者）

なお、質問紙作成に関しては、三野町の教育委員会教育長、三野町内３小学校の各校校長、PTA役員に検討を依頼し、より地域の現状に沿った質問紙構成を行うこととした。

## ３．分析結果及び考察

**１）「地域行事に対する意識」、「自由時間の過ご**

＊１　鳴門教育大学

### し方」、「学校週５日制への意識」についての因子分析及び因子の指標化と得点化

本研究における目的である「地域行事の現状を把握する」「学校週５日制の完全実施において子どもにゆとりは生まれたのか」ということについて考えるため、上記３項目を中心項目とし、各項目ごとに因子分析を行った。

#### ⑴　「地域行事に対する意識」の因子分析と因子の指標化及び得点化（表１）

①因子分析結果

「地域行事に対する意識」においては３つの因子を抽出した。

表１

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 |
|---|---|---|---|
| できなかったことができるようになった | 0.529 | 0.461 | 0.017 |
| いろんな事を知っているおじいちゃんやおばあちゃんはすごいなあと思った | 0.668 | 0.288 | −0.082 |
| わからないことを本で調べてみよう | 0.694 | 0.173 | 0.118 |
| もっと本を読もうと思う | 0.645 | 0.240 | 0.144 |
| 昔の遊びも面白いなあ | 0.662 | 0.310 | 0.138 |
| 行事以外でも友達と昔の遊びをしてみた | 0.713 | 0.349 | 0.194 |
| いろんな人の話を聞くのは面白い | 0.605 | 0.468 | 0.027 |
| 新しい友達ができた | 0.141 | 0.762 | 0.038 |
| 帰ってから家の人に話をした | 0.303 | 0.519 | −0.098 |
| あまり話したことのない友達と一緒に遊べてよかった | 0.165 | 0.598 | 0.237 |
| 近所の人に知り合いがふえてあいさつするようになった | 0.382 | 0.586 | 0.160 |
| 自分の住む町がますます好きになった | 0.439 | 0.502 | 0.147 |
| おじいちゃんやおばあちゃんを大事にしよう | 0.312 | 0.504 | 0.049 |
| わかったことがふえた | 0.533 | 0.572 | −0.017 |
| たくさんの人と知り合いになれた | 0.457 | 0.631 | 0.092 |
| また参加したい | 0.239 | 0.649 | 0.024 |
| 期待はずれで面白くなかった | 0.124 | 0.173 | 0.416 |
| 行事の前にどんなことをやりたいかアンケートがあった | 0.254 | 0.110 | 0.607 |
| ほんとはいやいや参加している | 0.025 | −0.091 | 0.784 |
| 友達も行くから参加している | −0.047 | 0.049 | 0.532 |

②因子の指標化

因子を構成する質問項目に共通する点を考慮し、因子名をつけた。

「因子１」は「行事以外でも友だちと昔の遊びをしてみた」「わからないことを本で調べてみよう」「いろんなことを知っているおじいちゃんやおばあちゃんはすごいなあ」等の項目で高い値を示している。よって因子１は「地域行事後の子どもの変化」と名付けた。

「因子２」は「あたらしい友だちができた」「たくさんの人と知り合いになれた」等の項目で高い値を示している。よって因子２は「人の輪拡大」と名付けた。

「因子３」は「ほんとはいやいや参加している」「行事の前にどんなことをやりたいかアンケートがあった」等の項目で高い値を示している。よって因子３は「地域行事後・期待満足薄」と名付けた。

③因子の得点化

各項目の質問項目に「とてもそうだ」を３点、「わりとそうだ」を２点、「あまりそうでない」を１点、「ぜんぜんそうでない」を０点として得点化し、グラフ化した。結果「地域行事に対する意識」の全体的な傾向を知ることができた（図１～３）。

因子１「地域行事後の子どもの変化」指標の得点分布（図１）

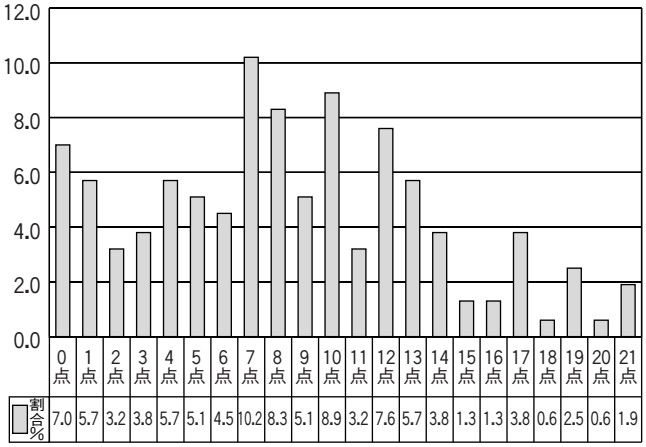



図１　地域行事後の子どもの変化

因子２「人の輪拡大」指標の得点分布（図２）

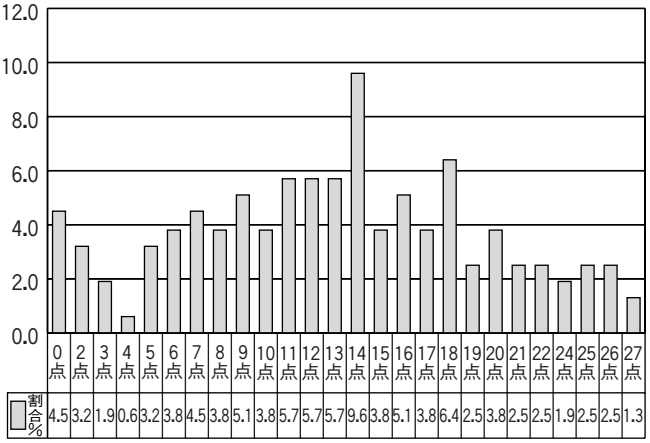



図２　人の輪拡大

因子３「地域行事後・期待満足薄」指標の得点分布（**図３**）

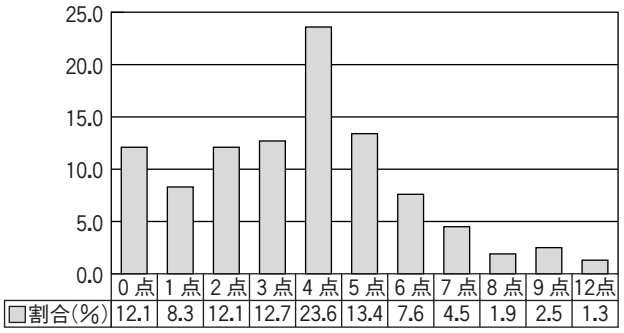



**図３　地域行事後・期待満足薄**

各因子の得点分布グラフを見ると、因子１「地域行事後の変化」（**図１**）では全体的に左よりの分布がみられる。因子２「人の輪拡大」（**図２**）では全体的には右よりの分布が見られる。地域行事において行事後の子どもの変化はやや少ないが、人の輪拡大の欲求はやや高いことがわかる。因子３「地域行事後・期待満足薄」（**図３**）では概ね正規分布の形状になっている。

④「地域行事に対する意識」についてのクロス集計及び重回帰分析による規定要因の検証及びまとめ

３つの指標について規定要因の検討を簡単に行ってみたい。

「地域行事後の子どもの様子変化」では、活動や学びに対する意欲、家族の子どもを認める行為が大きく影響していることが確認された。

「人の輪拡大」では友だち、家族など、子どもを取り巻く人々との関連が影響を与えていることが確認された。

「行事期待・満足薄」では、遊びに対する意識の強さが大きく関係していた。行事参加は負の規定要因となっていることが確認された。達成感は規定要因とはなっていないようである。

次に３つの中心項目について、各指標間の相関を調べたところ、以下の図のようになった。「地域行事後の子どもの変化」「人の輪拡大」では子どもの心の豊かさや友だち関係が強く関連していることが明らかになった。「行事の期待・満足度薄」指標ではふだんの活動が大きく影響しているといえる。

それぞれの指標に影響を及ぼす周辺指標を詳しく見てみると、「心豊か」「友だちとの絆」の影響が強い。家族や友だちに関することは地域行事参加後の子どもの様子の変化をもたらしたり、人との交流を好み、人間関係の輪を広げたいという思いをもたらしたりすることがわかった。

また、ふだんの活動的な子どもの現状が「行事の期待・満足薄」の各指標に大きく影響していることが明らかになった。そのような子どもは地域行事への期待も大きいといえるだろう。

(2)　「自由時間の過ごし方」の因子分析と因子の指標化及び得点化（**表２**）

**表２**

| | 因子1 | 因子2 | 因子3 | 因子4 | 因子5 | 因子6 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 近所をぶらぶらする | 0.442 | 0.237 | 0.222 | 0.104 | 0.052 | -0.062 |
| 図書館にいって本を借りる | 0.742 | -0.021 | 0.036 | -0.212 | 0.054 | 0.060 |
| 博物館や美術館に行く | 0.699 | -0.015 | 0.040 | -0.073 | 0.171 | -0.011 |
| 体や心を休める | -0.131 | 0.476 | 0.173 | 0.023 | 0.014 | 0.106 |
| テレビを見る | 0.033 | 0.512 | -0.213 | 0.012 | 0.187 | -0.094 |
| 読書をする | 0.034 | 0.411 | 0.052 | -0.011 | 0.061 | 0.149 |
| 寝る | 0.283 | 0.651 | 0.048 | 0.154 | 0.055 | -0.129 |
| 魚や虫をつかまえたり花や果物をとったりする | 0.183 | -0.126 | 0.816 | 0.034 | 0.034 | 0.138 |
| 家の人と遊ぶ | 0.128 | 0.104 | 0.408 | 0.203 | 0.298 | -0.023 |
| 友達と遊ぶ | -0.030 | 0.091 | 0.110 | 0.674 | 0.012 | 0.028 |
| スポーツをする | -0.087 | -0.096 | 0.058 | 0.569 | 0.151 | 0.112 |
| 家の人と出かける | 0.014 | 0.201 | 0.132 | 0.050 | 0.586 | 0.153 |
| 動物の世話をする | 0.258 | 0.045 | 0.155 | 0.134 | 0.565 | -0.010 |
| おけいこごとにいく | -0.057 | 0.098 | 0.022 | 0.128 | 0.106 | 0.759 |

①因子分析結果

「自由時間の過ごし方」においては６つの因子を抽出した。

②因子の指標化

因子を構成する質問項目に共通する点を考慮し、因子名をつけた。

「因子１」は「図書館に行って本を借りる」「博物館や美術館に行く」等の項目で高い値を示している。よって因子１は「社会教育施設利用」と名付けた。

「因子２」は「寝る」「テレビを見る」等の項目で高い値を示している。よって因子２は「家でだらだら志向」と名付けた。

「因子３」は「魚や虫をつかまえたり花や果物をとったりする」「家の人と遊ぶ」の項目で高い値を示している。よって因子３は「体験活動」と名付けた。

「因子４」は「友だちと遊ぶ」「スポーツをする」の項目で高い値を示している。よって因子４は「活動志向」と名付けた。

「因子５」は「家の人と出かける」「動物の世話をする」の項目で高い値を示している。よって因子５は「ふれあい志向」と名付けた。

「因子６」は「おけいこごとにいく」の項目で高い値を示している。よって因子６は「おけいこごと」と名付けた。

③因子の得点化

各項目の質問項目に「とてもそうだ」を３点、「わりとそうだ」を２点、「あまりそうでない」を１点、「ぜんぜんそうでない」を０点として得点化し、グラフ化した。結果「自由時間の過ごし方」の全体的な傾向を知ることができた。

因子１「社会教育施設利用」指標の得点分布（**図４**）

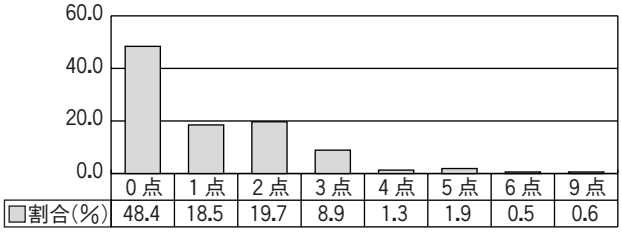



**図４　社会教育施設利用**

因子２「家でだらだら志向」指標の得点分布（**図５**）

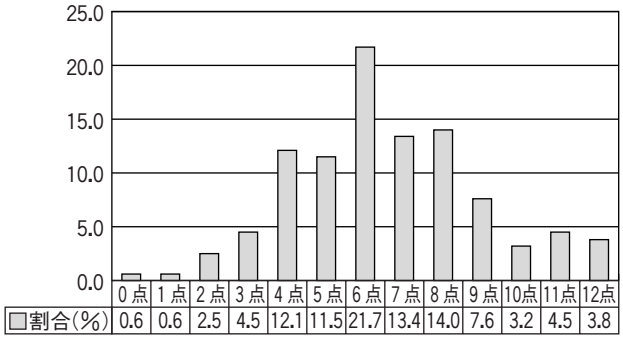



**図５　家でだらだら志向**

因子３「体験活動」指標の得点分布（**図６**）

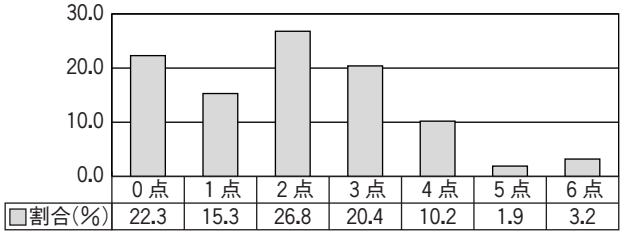



**図６　体験活動**

因子４「活動志向」指標の得点分布（**図７**）

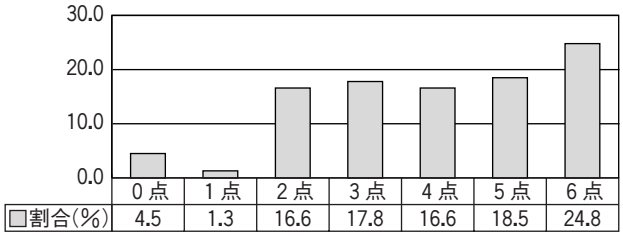



**図７　活動志向**

因子５「ふれあい志向」指標の得点分布（**図８**）

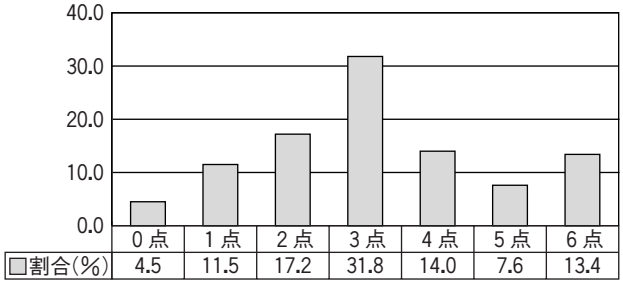



**図８　ふれあい志向**

因子６「おけいこごと」指標の得点分布（**図９**）

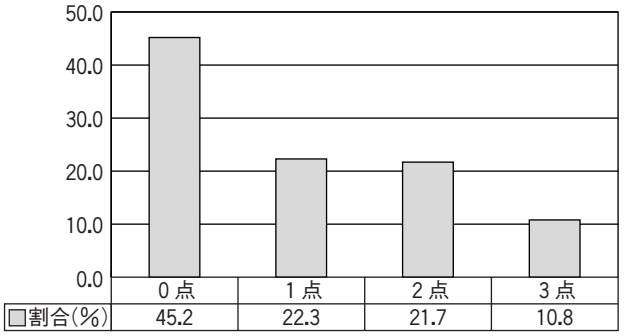



**図９　おけいこごと**

各因子の得点分布グラフを見ると、因子１「社会教育施設利用」（**図４**）、では左よりの分布が見られる。自由時間において社会教育施設はあまり利用されていないと推測される。因子２「家でだらだら志向」（**図５**）では概ね正規分布の形状になっている。因子３「体験活動」（**図６**）では左よりの分布がみられ、体験活動の機会の少なさがうかがえる。因子４「活動志向」（**図７**）では右よりの分布がみられ友だちと遊んだりスポーツをしたりすることが多いことがうかがえる。因子５「ふれあい志向」（**図８**）では概ね正規分布の形状がみられた。因子６「おけいこごと」（**図９**）では左よりの分布がみられ、自由時間において、おけいこごとに行くことは少ないことがうかがえる。

④「自由な時間の過ごし方」についてのクロス集計及び重回帰分析による規定要因の検討及びまとめ

６つの指標について規定要因の検討を簡単に行ってみたい。

「社会教育施設利用」では、勉強が好きという気持ち、屋内遊びの頻度が強く影響していた。社会教育施設内で行われる活動に関連する結果となった。

「家でだらだら」については塾が強く影響していた。子どもがストレスを一番感じる場所なのかも知れない。また、家族の子どもを休ませてやりたいという気持ちが表れていることも確認できた。

「体験活動」ではふだんの家族との活動の頻度が影響していることが確認された。また、さびしさが強かったのは体験活動で人とのふれあいを求めているのではないかと考えられる。

「活動志向」では勉強に対する思いが強くあらわれたのが意外であった。時に学校での体験的授業との関わりは子どもの活動のきっかけとなると考えれば今後も重要視されるべきであろう。

「ふれあい」では家族や地域の人との会話や人とふれあう気持ち、家族と一緒に活動したことが影響していた。地域行事でもこのようなことが大切にされるべきであろう。

「おけいこごと」では勉強や体験的な授業が好きという要因の他に、友だちとの絆を大事にすることが確認された。おけいこごとに行くのは友だちもいっているからという理由も考えられそうである。

「社会教育施設利用」指標には、多くの周辺指標と関連があった。社会教育施設をよく利用する子どもは「活動」を好み家族との「ふれあい」も大事にしていることがわかる。社会教育施設の活動にはそのような要素を含むものが多いので、そのようなこととも関連しているのかもしれない。

また、クロス集計に立ち返ってみると、「社会教育施設利用」指標と「学び」「遊び」「人とのふれあい」に関する指標との関連が多く見られた。図書館、美術館、博物館など、社会教育施設には豊富な資源がある。また、おはなし会や展示品の解説、野外体験活動など、独自でさまざまな催しが企画、実施されているのも周知の通りである。このようなことから、社会教育施設の利用は家族のふれあいを高める機会、さまざまな催しを通して、子どもの活動意欲を高める機会や場となることが考えられるほか、子どもたちの学びや活動への欲求を満たすという点からも、学校週５日制完全導入後にはその果たす役割がますます重要視されるようになるのではないかと考える。

次に、各指標に影響を及ぼす周辺項目指標を具体的に見てみると、「体験授業」「勉強好き」が多指標に影響を与えていることがわかる。また、「親・知識体力獲得」も影響が強い。ふだんの学校での勉強に充実感を感じていることが、さまざまな活動の契機になると考えられる。学校での勉強の内容が鍵を握っているといえる。また、家族や友だちとのかかわりに関する指標が多く見られ、これら「人とのつながり」ということも自由時間の子どもの過ごし方に影響を与えているといえる。

なお、「体験活動」「家でだらだら」指標に関して

は、他の中心指標との関連は見られなかった。

(3)　「学校週５日制に対する意識」の因子分析と因子の指標化及び得点化（表３）

①因子分析結果

「学校週５日制に対する意識」においては２つの因子を抽出した。

表３

| | 因子1 | 因子2 |
|---|---|---|
| 学校の勉強時間が多すぎたのだから当然だ | 0.548 | -0.286 |
| 学校での勉強の時間が少なくなるのでいい | 0.742 | -0.313 |
| 自由に使える時間が増えるから必要だ | 0.794 | -0.013 |
| 遊び時間がふえるのでいい | 0.594 | 0.307 |
| 学校に行く時間が少なくなるのでさびしい | -0.117 | 0.757 |
| 学校で友達と遊べないのでさびしい | 0.092 | 0.660 |

②因子の指標化

因子を構成する質問項目に共通する点を考慮し、因子名をつけた。

「因子１」は「自由な時間がふえるから必要だ」「学校での勉強時間が少なくなるのでいい」等の項目で高い値を示している。よって因子１は「５日制・自由時間増」と名付けた。

「因子２」は「学校に行く時間が少なくなるのでさびしい」「学校で友だちと遊べないのでさびしい」の項目で高い値を示している。よって因子２は「５日制・さびしさ」と名付けた。

③因子の得点化

各項目の質問項目に「とてもそうだ」を３点、「わりとそうだ」を２点、「あまりそうでない」を１点、「ぜんぜんそうでない」を０点として得点化し、グラフ化した。結果「学校週５日制に対する意識」の全体的な傾向を知ることができた。

因子１「自由時間増歓迎」指標の得点分布（図10）

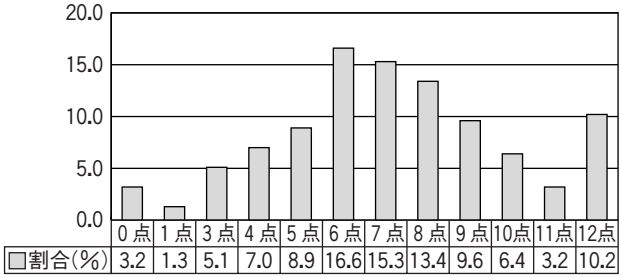



図10　自由時間増歓迎

因子２「さびしさ」指標の得点分布（図11）

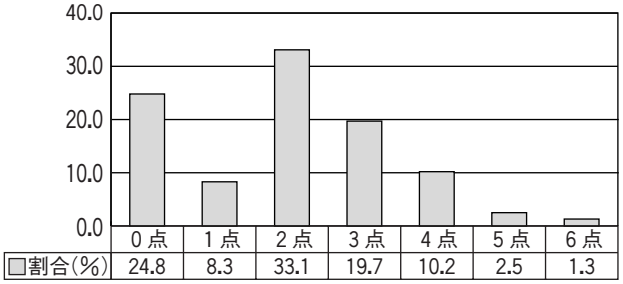



図11　５日制・さびしさ

各因子の得点分布グラフを見ると、因子１「自由時間増歓迎」（図10）では最高群で高い割合がみられるものの、全体的には概ね正規分布の形状がみられる。因子２「さびしさ」（図11）ではやや左よりの分布がみられ、５日制の導入で子どもたちがさびしさを感じることは少ないようであることがうかがえる。

④「学校週５日制に対する意識」についてのクロス集計及び重回帰分析による規定要因の検討及びまとめ

２つの指標について規定要因の検討を簡単に行ってみたい。

「自由時間増歓迎」では学校嫌悪の影響、遊びたいという思いが規定要因となっていることが確認された。

「さびしさ」では家族とのふれあいが大きく影響していた。ふだん家族とのふれあいが多いと休みになって誰も周りにいないときなどにさびしさが募るものと考えられる。

次に、２つの中心指標間の相関を調べたところ、２項目間には強い関係性は見られなかった。

各指標に影響を及ぼす周辺指標を見てみると、学校嫌悪や遊びに関する各指標は「自由時間増歓迎」の指標に、家族とのふれあいに関する指標が「さびしさ」指標に影響を与えていた。「学校がいやだから」「遊びたい」から「休みがあるほうがいい」という思い、家族とのふれあいが強いと、ひとりでいる時にさびしさを感じている子どもの姿がうかがえる。

**２）質問紙調査のまとめ**

「地域行事に対する意識」「学校５日制に対する意識」「自由時間の過ごし方」全中心指標の相関を

調べた。その結果を図式化し、考察を加えることにより、本章のまとめとする（**図12**）。

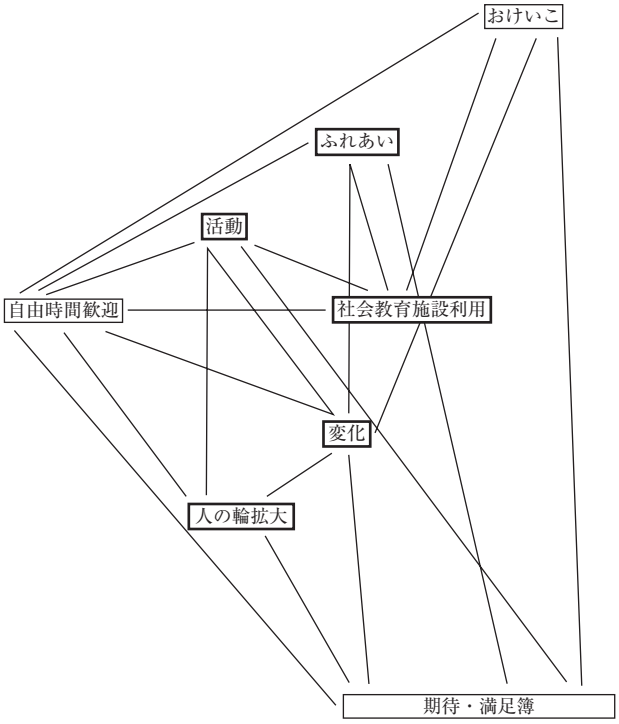


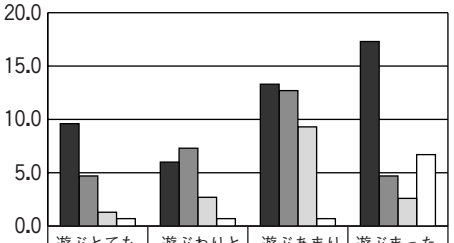

**図12**

全中心指標の関連では、「さびしさ」「体験活動」をのぞく各指標において多くの指標と強い関連が見られた。本研究の目的である「学校週５日制」「地域行事」の視点から整理すると、地域行事は単に大勢で活動を行うだけでなく、人の輪を広げる場でもあるといえる。そしてそこには子どもの「ふれあい」欲求を満たす場でもあるといえる。そのような要素を含んだ活動が行事後の子どもの変化をも生むと考える。逆の視点から見ると、地域行事にそのような要素がないと地域行事への期待や満足が薄くなり、行事後の子どもの変化もあまり見込めないということである。

学校週５日制に関しては、自由時間増を歓迎するのは様々な活動をするだけでなく、家族とのふれあいを持ったり行事に参加して人の輪を広げたりしたいという欲求にも関連しているといえる。家族が子どもと同じ日に休めることや、休みの日に地域行事が催されるなど、子どもの居場所があることが重要になってくるといえよう。

また、学校週５日制と地域行事を結ぶのに重要な役割を果たすものとして、社会教育施設の重要性も明らかになった。重回帰分析では社会教育施設を利用する規定要因として、「勉強が好きな子ども」「屋内遊びを好む子ども」の２要因が強く影響していたが、クロス集計の結果に立ち返ってみると、社会教育施設の重要性が確認されたともいえる。学校週５日制完全実施後の社会教育施設の役割も再考する必要があろう。また、魅力的な要素を持つ社会教育施設が存在しても、やはりそれが近くにある地域とない地域では、利用の頻度も変わってくると考えられる。子どもたちにとっては「魅力的な行事があって行きたいんだけど､連れて行ってくれる人がいない」「遠いからそんなに頻繁には利用することができない」という事態になることもあろう。そこで、社会教育施設と地域が連携し、社会教育施設が持つ魅力やメリットを地域行事へ取り入れることも考えられるべきであろう。学校との連携ということではずいぶん前から実践されてきたことであり、ある程度の成果もおさめていることからしても、社会教育施設と地域が連携することによって地域行事がよりよい魅力的なものになることは十分考えられることではなかろうか。

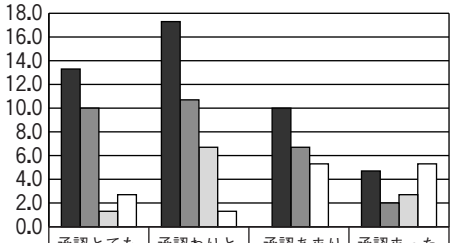
周辺項目を含めた全指標間の関連では「家族や友だちとの関わり」に関する指標、「遊びや活動に関する指標」が、多くの指標に影響を与えていた。そのうち家族とのかかわりについては、先に述べた、人との「ふれあい」や「人の輪拡大」の意識をもつことに関連指標が集中したことから重要性が強いと思われる。そこで「家族とともに活動した経験」と「地域行事の参加」、「家族承認」と「地域行事の参加」についてクロスしたところ下図のようになった（**図13・14**、$p<0.05$）。




（単位：%）

| | 遊ぶとてもそう | 遊ぶわりとそう | 遊ぶあまりそうでない | 遊ぶまったくそうでない |
|---|---|---|---|---|
| ■ 地域行事よくある | 9.3 | 6.0 | 13.3 | 17.3 |
| ■ の参加わりとある | 4.7 | 7.3 | 12.7 | 4.7 |
| □ の参加あまりない | 1.3 | 2.7 | 9.3 | 2.6 |
| □ の参加まったくない | 0.7 | 0.7 | 0.7 | 6.7 |

**図13　「地域行事の参加」と「ふだんの親子で遊ぶ機会」のクロス**




| （単位：%） | 承認とてもそう | 承認わりとそう | 承認あまりそうでない | 承認まったくそうでない |
|---|---|---|---|---|
| ■ 地域行事よくある | 13.3 | 17.3 | 10.0 | 4.7 |
| ■ の参加わりとある | 10.0 | 10.7 | 6.7 | 2.0 |
| □ の参加あまりない | 1.3 | 6.7 | 5.3 | 2.7 |
| □ の参加まったくない | 2.7 | 1.3 | | 5.3 |

**図14　「地域行事の参加」と「家族の承認」のクロス表**

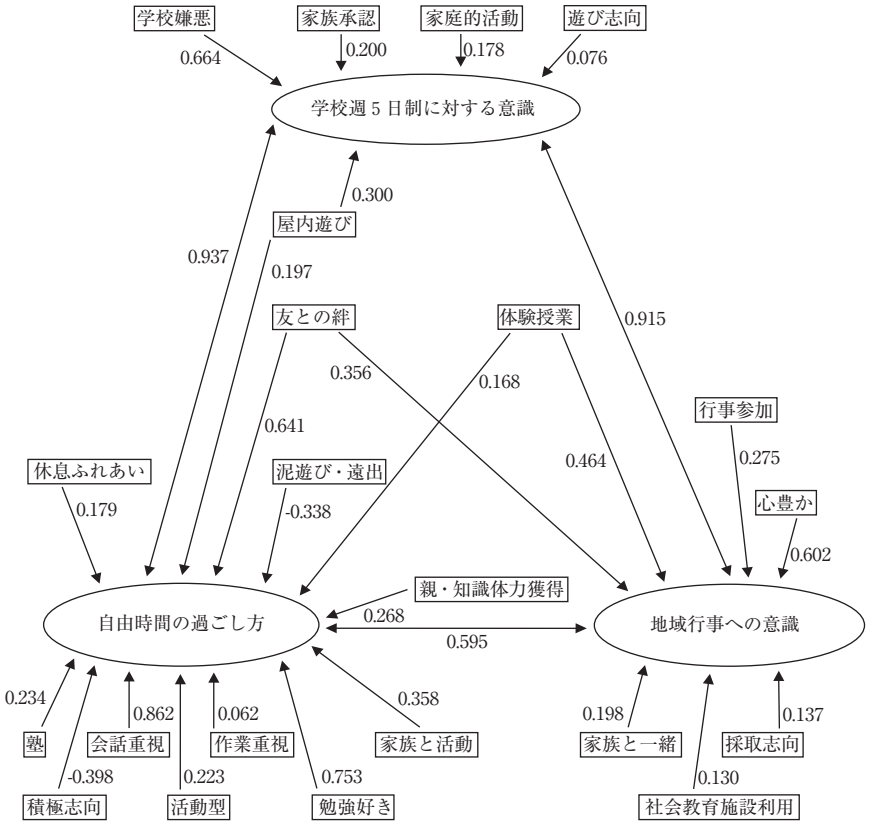
図からわかるように、家族との遊びの経験が少ない子どもほど、また、家族の子どもを認める行為が多い子どもほど地域行事の参加が高い。「家族との遊び経験が少ないので地域行事に参加する割合が高い」ということ、「自分の事を認めてくれる家族がいる」という安心感が人の輪を広げるという「外の世界」に目を向けるきっかけにもなり、それが地域行事後の変化にもつながることが確認された。

「遊びや活動に関する指標」については、活動を好む子どもや体験活動の動機づけとなっていることがわかった。

そのほか学校生活に関する指標が多くの中心指標と関連があったことは見逃せない。体験的な授業をはじめ、子どもが楽しいと思えるような授業を構成し、行うことは、休みの日の子どもに過ごし方や活動の動機にも影響することが明らかになった。

以上のようなことから、地域行事については、地域行事を構成する上では、これらの事項をふまえ、人とのふれあいや活動量がある程度盛り込まれた内容を検討することが重要ではないかと考える。また、家族や友だちとのつながりを大事にしている傾向や、家族と一緒に活動することが及ぼす影響も大きいことから、家族そろって参加できるようなプログラムが検討されてもよいだろう。さらに、地域行事だけでなく、ふだんの家族や地域の人々とのふれあいが与える影響も確認されたことから、ふだんの家庭や地域での子どもと大人のふれあいも大事にされるべきである。ふだんからできるだけ子どもと関わるという姿勢が子どもを囲む大人に求められるといえよう。それが「地域で子どもを育てる」ということにもつながると考える。

質問紙調査のまとめとして、最後に、各要因間の関連をまとめ、以下に示す。



## ４．検証と課題

### １）「学校週５日制の完全実施で子どもにゆとりは生まれたか」の検証

自由時間が増えたことに対して、親も子どもも肯定的な意見が多いことを考えれば、「遊んだり自分の好きなことをしたりするための時間がふえた」という、時間的なゆとりは生まれたといえるのではないだろうか。「やりたいことがたくさんある」子ども、「遊び足りない」と感じる子どもには学校週５日制歓迎の意向があると考えられる。また、学校嫌悪の気持ちを持つ子どもにとっても、気持ちを穏やかにしたり、ふだんの学校生活で張り詰めた気持ちを緩め、家族とのふれあいによって精神的安定を得たりするという側面があると思われる。

しかしその反面､おけいこごとや塾に通う子ども、「これが終わったら次はあれ」というように、管理された細切れの時間の中で動く子どもなど、かえって忙しさを感じる子どももやはりいるのではないだろうか。また、「学校で友だちと活動できない」ことや「学校で友だちと会えない」ことに「さびしさ」を感じている子どもたちがいることは調査の中で明らかになった。時間的なゆとりはあるが、それがかえって精神的には余裕を持て余すことになってしまい、さびしさや孤独感を感じさせることになっているのではないかと考える｡社会教育施設に行ったりする子どもがいたり、地域行事の参加が多かったりするのも、このようなところに原因があるのかもしれない。

### ２）「地域行事の現状と学校週５日制で生まれた自由時間活用との関連」

前項で考察したように、学校週５日制の導入によりさびしさを感じているのだとすれば、友だちはもちろん多くの人々とふれあえる地域行事は、そのような子どもたちにとって、学校週５日制によって生まれた自由時間を活用する場、「心の居場所」のひとつになるといえよう。また、ふだんの自由時間の過ごし方で体験活動を好む子どもの現状が確認されたこと、「他の学年や学校の友だちも欲しい」「地域の人と関わることに抵抗が少ない」というような、「人の輪拡大の欲求が強い」ことや「日頃から地域の人とのふれあいがある」ということを考えても、地域行事は子どもたちの欲求を満たす要素を含んでおり、この点からも地域行事は学校週５日制によって生まれた自由時間を有効活用するための場として重要な役割を果たすといえよう。前章においては人のふれあいがあって、その中で子どもがよい影響を受けて変化をしていくというふうに、人とのふれあいが地域行事には重要なことであるということが確認されたが、この点からも地域行事への期待はこれからますます高まってくると考える。

現状としては、地域行事の種類が限られているということ、画一化やマンネリ化の状態があることが確認された。しかし、行事によっては遊びの変化や高齢者との接し方の変化など、子どもにプラスの変化をもたらすものもあるということも親子の質問紙調査から明らかにされたことである。一概に問題点ばかりだとはいえない。「光」の部分が存在しているのも確かである。親の意識として、地域行事を「体験活動をしたり人とのふれあいを持ったりする場」として肯定的にとらえる意見が多かったのもそのようなことが影響しているのかもしれない。

### ３）今後の課題～よりよい地域行事のために～

今後の課題としては地域行事の内容構成において改善が必要であると思われる。そこには多くの要素が関わってくると考えられる。

まず第一にニーズの把握である｡行事が実りあるものとなるためには前提として地域の人々の関心を集めるもの、人々をひきつける内容を持っていることが求められよう。そのためには人々がどのような行事を望んでいるのかをつかむ必要がある｡また、各行事後にアンケートをとるなどして反省材料を見つけたり、次回への改善点の洗い出しを行うきっかけにしたりしていくことも大事であろう。そこでは学校の協力が考えられる。子どもたちを通して親や高齢者などに対してのニーズ把握も行えるのではないだろうか｡調査では地域行事のマンネリ化や画一化も指摘されていた。ニーズの把握を行うことを地域行事改善の第一歩としたいものである。

第二に連携・組織の必要性である。子どもたちの自由時間の過ごし方で顕著だったものに社会教育施設の利用ということがあった。また、子どもの学校

図書館の利用と読書量の間にも有意差が見られた。このようなことから、社会教育施設や学校との連携が地域行事を構成する上で有効になるのではないかと考える。前者の場合には「社会教育施設が近くにない」という意見が多かったため、近隣の社会教育施設の人材や知恵を借りたり学校施設を利用したりすることにより、自地域でも社会教育施設で行われているような行事に近いものが行えるのではないかと考える。後者の場合は地域行事とまではいかないが、「地域で、地域にある資源を使って子どもを育てる」という「地域で子どもを育てる」ことにつながるのではないかと考えられる。ここでは学校の協力が欠かせない。特に学校図書館司書教諭に寄せられる期待は大きいであろう。しかし何もかもを学校任せにするわけにはいかない。そこで、研究Ｉで取り上げたような組織の必要性が生じてくる。責任を持って休日の学校を管理できる体制が整えば、学校は休日でも地域の一施設として有効に利用されるべきである。ここでも組織作りの前提として、地域の各施設、団体間の連携が求められるところであろう。

そしていちばんはじめに作られるべきであり、しかもいちばん重要な組織は地域行事を企画・運営していくというおおもとの組織であろう。親への役割分担、子どもの実態の把握、行事の反省・改善など、地域をよりよい方へと引っ張っていく組織の存在を忘れてはならない。そしてその中から地域において中心的存在となり組織に携わっていく人物が生みだされ、後継者の育成も進められるというのが理想であろう。

第三に話し合いの場を設けることも重要な課題である。行事の計画段階ではもちろん、連携の場、ニーズの把握の場でも話し合う場を持つことは大事である。定期的に集まる機会を設けたり、意見交換ができる場の設定が必要であろう。ここでも学校の協力、教師の協力、関係諸機関の協力が必要となってくるであろう。

そして第四としては「人とのつながり」を忘れてはいけないということである。行事ではもちろんだが、人と人のつながりがあってはじめて行事は実現するのである。家庭内での家族間のふれあいはもちろん、地域内での大人どうし、大人と子どもの交流もふだんの生活において多く持たれることが重要であろう。そしてそれはよりよい地域行事を作るというだけでなく、地域全体に一体感や連帯感を与え、よりよい地域作りや地域活性化への可能性も秘めていると考える。

以上のようなことから、地域行事が学校週５日制でできた自由時間の活用の場のひとつとなり、さまざまな活動や人とのふれあいができるような場をどのように設定するか、そして多くの人々とのふれあいやさまざまな体験を通して、子どもたちそれぞれが気づきをするにはどうしたらよいか、そしてその気づきを子どもの変化、ひいては「生きる力」の育成にいかにしてつなげるようにするか。このようなことを念頭におきながらよりよい地域行事について地域一帯となって考えていく。これが今後の「学校週５日制時代」の地域行事の課題ではないかと考える。